

## 祝 創立 110 周年 ～本校のこれまでの歩み～

本校の創立記念日 5 月 7 日は、私立東華女学校設立が知事により許可された日です。今年創立 110 年目を迎える本校は、どのような歴史を刻んで来たのでしょうか。110 年の道程は決して平坦ではなく、様々な困難や岐路がありました。そして現在、仙台二華として開校 5 年目を迎え、二華中 1 回生は高校 2 年生となりました。また、文部科学省からスーパーグローバルハイスクールにも指定され、さらに大きく飛躍していく時期を迎えています。このようなときこそ、本校の歴史をたどり、本校の基盤、担ってきた役割を確認し、本校そして生徒の皆さんがこれから進んでいくべき道を考えるきっかけにしたいと思います。

### <私立東華学校 ～宮城の教育の幕開け～> 前史

宮城県仙台二華中学校・高等学校のルーツは、仙台出身で日銀の第二代総裁となった富田鉄之助をはじめとする仙台の財界や政界の有志と、同志社大学の創始者であり、日本の近代教育幕開けに奔走した新島襄とが、明治 20 年に組織した財団「東華義会」に遡ります。

新島襄は 2013 年の NHK 大河ドラマ「八重の桜」に八重の夫として登場しました。彼は江戸最末期の元治元年（1864 年）21 歳の年に、自由を求め函館から国禁を犯して単身アメリカに出国します。彼の心は、アメリカへ行くという大きな夢と、国の掟を破るといふ不安が交錯していたに違いありません。彼はそのときの境地を七言絶句にこう読んでいます。「男児決志馳千里 自嘗苦辛豈思家・・・」（男児志を決して千里を馳す 自ら苦辛を嘗（な）む 豈（あに）家を思わんや・・・）

アメリカで 10 年間学んだ新島は、帰国後、キリスト教主義学校の開校に向けて動き出します。何事も東京一極集中となることを懸念した新島は、地方に根ざした教育機関を設立すべく、明治 8 年、まず京都に同志社英学校、現在の同志社大学を設立します。彼が次に教育（キリスト教布教）の拠点として着目したのが東北地方でした。新島は、仙台出身で後に日銀の第二代総裁となる富田鉄之助（当時日銀副総裁）を東京に訪ねます。岩倉具視使節団の通訳として抜擢され、異国で苦楽を共にした経験を持つ二人は、地方にこそ真の教育を可能にする場があるという認識で一致し、学校設立の場所を仙台に決めます。当時の仙台藩は、戊辰戦争で会津藩を支援したために新政府から冷遇されていました。しかし、旧仙台藩士たちは地元の復興を願い、仙台藩出身の在京学生を支援する奨学育英団体「仙台造士義会」（東華義会の前身）を組織していました。これが学校設立の力になると判断されたことと、富田鉄之助が初代会長（二代目は大槻文彦）であったことなどが、仙台への学校開設の流れを確実なものとなりました。

そして明治 19 年、同志社の東北分校とも言える「宮城英学校」が新島襄を校長に迎えて開校、翌年に私立「東華学校」と改称され、理事会も「東華義会」と称することとなります。本校の校長室にも掲げられている「修實徳勿求虚榮」（実徳を修め虚榮を求むるなかれ）の扁額は東華学校の校是です。「東華」の名は、万葉集にある大伴家持のうた「天皇（すめろぎ）の 御代栄えんと 東なる みちのく山に 黄金華咲く」に由来します。



東華学校校舎、後に本校の源流となる東華女学校の校舎となる。SEEK TRUTH AND DO GOOD の文字が掲げられ、現在の二華会館に引き継がれる。

しかし、日本国内は次第に国粋主義が強まり、キリスト教をはじめとする自由主義思想を圧迫しはじめます。学校経営を篤志家からの募金に頼っていた東華学校の経営基盤はみるみる弱体化し、なおかつ、明治 24 年の中学校令改正により 1 県 1 中学校設置の方針が打ち出され、翌年県立尋常中学校（仙台大高の前身）の開校決定が最終ダメージとなり、東華学校は開校 5 年半の歴史をもって廃校に追い込まれます。その間、新島襄は、無理に無理を重ねた体がすでに限界を超え、東華学校廃校 1 年前の明治 23 年、46 歳という若さで世を去っていました。東華学校の命は 5 年半と短かったですが、富田、新島の意志は、陸軍大将山梨勝之進、河北新報創立者の一力健次郎、作家の真山青果など、数々の傑人を生み出す力となりました。

県立尋常中学校は、廃校となった東華学校校舎を買い取って出発したため、東華学校の生徒はほとんど尋常中学校に転入することになります。明治 32 年、尋常中学校は南六軒丁に新築移転し、清水小路の東華校舎には勾当台通りにあった尋常中学校の分校（現仙台二高）が入居します。翌年、両中学校はそれぞれ宮城県第一中学校（現仙台大高）、宮城県第二中学校（現仙台二高）と改名されます。二中は清水小路の東華校舎から第 1 回卒業生を出した後、明治 35 年北六番丁へ新築移転します。2 年後、清水小路に残っていた一中分校が廃校となったことを受け、宮城県は清水小路の校地・校舎を東華義会に返還します。

### <私立東華女学校 ～女子高等教育の草分け～>

厳しい世の流れの中で東華学校の理想が挫折しても、東華義会の教育に賭ける情熱は冷めることはありませんでした。次に東華義会が目に向けたのが、遅れていた女子の高等教育でした。東華義会に返還された清水小路の校舎（現日本たばこ産業仙台支店付近）を学舎に、明治 37 年（1904 年）、当時旧制二高の教頭であった三好愛吉教授を兼任校長として迎え、私立「東華女学校」を創設します。翌年には「東華高等女学校」に改称しますが、これが仙台二華の直接的な源流となります。初代三好愛吉校長は、「単なる良妻賢母ではなく男子と同等の教養を持つ世界に通用する婦人たれ」と語り、校風として「敬・愛・信」の実現を掲げました。



初代三好愛吉校長

明治 41 年には東九番丁（連坊の現在地）へ移転し、文武両道の輝かしい教育活動を展開することとなります。東北屈指の高等女学校として学業の充実に加えて、学友会では運動会や園遊会、寄宿舎での雛祭り（現在に続く）など多彩な行事が催され、東華高女は文化教養の先端をいく啓蒙の場として「東華魂」を開花させ、その伝統は今も様々な形で生き続けています。

### <宮城県第二高等女学校 ～私立と公立の合併～> 歴史的試練

大正 7 年には宮城県女子師範学校（中島丁 現宮城一高：一女高の地）内に、併設の形で「宮城県第二高等女学校」が開設されます。当時高等女学校への志願者が急増していたのを受け、併設は県財政難のため窮余の策でした。ところが、女子師範への高女併設は思想上好ましくないとの問題が起これ、更に実績とは裏腹に経営難に陥っていた東華高女の存続問題とも絡み、この後は、政治的課題として 1 年半もの間議論されます。（この間、二高女廃止の意見書が議会を通過するという危機に見舞われます）。結局、大正 10 年（1921 年）、私立東華高女は県に移管と決まり、二高女が東華高女を吸収合併、東華高女は廃校とすることで決着をみます。それまで宮城の教育を牽引してきた東華義会は校地校舎一切を県に譲渡して解散します。そして、

新生「宮城県第二高等女学校」は、中島丁から東華高等女学校の連坊校舎に移ってきた二高女生 250 名と、すでに連坊校舎を学舎としていた東華高女生 440 名、それに新入生 250 名をあわせた約 1,000 名の大規模校として歴史的なスタートをします。

統合した二高女が東華の校舎に移ってきただけでなく、多くの教師が東華出身であったという変則的な統合でした。また、公立と私立という校風の異なる学校の合併には多くの苦難を伴い、当時の生徒間にしこりを残したことも否めない事実でした。そこで、当時の小倉博校長は女学生にも旧制高校生と同じような生活を送らせようと、全国的にも珍しい野球部を創るなど学友会活動を活発化し、新生二高女の発展に尽力すると共に、直ちに二高女・東華同窓会を発足させました。この同窓会はのちに両者の校名を合わせた「二華会」と名乗り現在まで続いています。こうして東華は二高女に生き、二高女は東華にいきることになりました。



全国的にも珍しかった女子野球部

大正 15 年には、「夕焼け小焼け」「どこかで春が」の作曲者である草川信（しん）作曲により、今日もなお歌い継がれている校歌が制定されます（校歌 2 番の冒頭「黄金花咲くみちのくの」も大伴家持の歌に由来）。こうして、現在まで続く連坊の地に、二高女の原型が完成します。

大正 15 年には宮城県女子専門学校が併設されますが、昭和 9 年に女専が向山へ独立移転する（現在の向山高校の地）のを契機に、すでに老朽化し手狭となった東華高女から受け継いだ校舎とその配置を、解体、移動し大整理を行います。

## <宮城県第二女子高等学校 ～戦後の発展～>

昭和 12 年に日中戦争が始まり戦時色が刻々と強まっていく中、普通授業は削られ生徒達は勤労作業に駆り出されていきます。昭和 20 年 7 月、仙台が焼け野原となった大空襲では、幸いにも本校舎は戦火を免れ、8 月 15 日終戦を迎えることとなりました。戦後の学制改革の中で、本校は昭和 23 年（1948 年）「宮城県第二女子高等学校」として生まれ変わります。生徒数 720 名での発足でした。

戦後民主主義の風潮を受けて、県下でも画期的なカリキュラムが研究・実践され、生徒の自発的な学習態度が重んじられ、図書館活動も充実しました。また、生徒会の自主的な運営も推進され、様々な学校行事や部活動が盛り上がりを見せ、その校風は現在まで受け継がれています。

昭和 43 年には県立学校初の鉄筋 4 階建て校舎が完成し、同窓会館（旧東華本館）も老朽化のために解体、昭和 49 年に二華会館（図書館、視聴覚室、食堂、和室、同窓会室）に生まれ変わります。同時期、スクールカラー（青）や校訓（明朗誠実・研磨創造・自主協調）が制定され、二女高は明るく充実した発展を遂げていきます。

さらに昭和 51 年には、南北学区制の導入により二女高は県内屈指の進学校としての地位を確立していくこととなりますが、創立以来の文武両道の精神は脈々と引き継がれ、運動部・文化部ともに素晴らしい実績を上げ続けています。

平成 16 年（2004 年）には東華女学校から数えて創立百周年を迎え、記念式典、記念行事が厳粛かつ盛大に執り行われ、『二女高百年史』が刊行されました。またその 3 年後には、本校同窓会「二華会」が創立百周年を迎え、記念総会開催と共に、記念誌『ももとせ 一華ひらく未来へ』が刊行されました。

## 〈宮城県仙台二華中学校・高等学校 ～あらたなる飛躍～〉

平成 13 年 3 月に県が発表した「県立高校将来構想」により、県内の男女別学校は平成 22 年度までに全て共学化されることとなり、魅力ある高校作りの一つとして「中高一貫教育の推進」が掲げられました。この施策のもと、本校は 21 世紀を支える新しい学校に生まれ変わるべく、併設型中高一貫校の道を歩むこととなります。この変革は大正 10 年の東華高女、二高女合併を凌ぐ歴史的大変革です。

本校は平成 20 年 4 月から平成 22 年 3 月までの 2 年間、明治 41 年以来 100 年にわたって住み慣れた連坊の地を一旦離れ、根岸の仮校舎へ移転しました。その間連坊の現在地にある昭和 43 年来の校舎を全て取り壊して校舎が新築されました。新校舎は、東京以外では初となる、7 階建て（一部 8 階相当）の高層校舎で、校舎本体の中央は 7 階吹き抜けのアトリウムが設けられました。また、校歌、校章、スクールカラーは二女高のものを引き継ぎ、制服も継承することを基本にデザインされました。シンボルツリーは 80 周年記念館の横にあったシダレザクラが選ばれました。新しい校名は、半年間にわたる公募などの多彩な活動により、多くの県民の方々の力を得て、「宮城県仙台二華中学校・宮城県仙台二華高等学校」となりました。

平成 22 年 4 月 1 日、馴染みの連坊の地に新築された学舎を得て、男女共学の宮城県仙台二華高等学校及び宮城県仙台二華中学校が開校し、「豊かな心と高い知性を持ち、進取の気風と創造性にあふれ、社会のリーダーとして、わが国や世界の発展に貢献できる人間を育成する」を教育方針に、「進取創造・至誠貢献」を校訓として、「総合力日本一の中高一貫教育校」を目指してスタートしました。またこの年、仮校舎のあった根岸の跡地は第二グラウンドとして分掌換えされ、12 月には創立百周年記念事業実行委員会から鉄筋 2 階建ての二華会館が寄贈され、施設・設備的にも充実しました。

そのような歴史的な開校年度の平成 23 年 3 月 11 日、忘れることのできない東日本大震災が起こります。マグニチュード 9.0 という日本周辺における観測史上最大の地震により、仙台も震度 6 強の揺れに襲われ、本校でも図書館の本が散乱、音楽室のピアノが転倒するなどの被害が出ます。しかし、新しい校舎、体育館、二華会館自体に構造的な大きな被害はなく、帰宅できない生徒や近隣住民の心強い避難場所としての役割を果たしました。

そして今年度、幾多の素晴らしい歴史を刻み、3 万を超える多くの卒業生を輩出しながら創立 110 周年を迎えることとなりました。二華会と P T A の多大な支援を受け、校舎南面に LED バックライト付きの校名看板と創立 110 周年記念懸垂幕が設置されました。さらに文部科学省からスーパーグローバルハイスクール (S G H) の指定も受け、本校の目的の一つであるグローバルな人材育成もさらに高い段階に進みます。



この節目の年を機に、生徒の皆さん一人ひとりが本校の歴史を顧みてその重みを感じ、それを土台として、これからも新たな挑戦をしながら、素晴らしい歴史を刻んでいかれることを期待しています。

平成 26 年 5 月 7 日

宮城県仙台二華中学校・高等学校長 倉光 恭三

※本原稿は、本校同窓生の臼井優子氏の原稿に元校長久力誠氏が加筆しまとめた 104 年目の創立記念に寄せた文章をもとに、さらに加筆しまとめたものです。写真は二華会保存のパネルから複写しました。

(編集担当：副校長 遠藤恒史 教頭 加藤徳善 事務部長 庄司美智 総務部長 佐藤佐助)